

英語授業力雑感

高橋貞雄 Takahashi Sadao
(玉川大学)

英語教育を行う上で大切なものは沢山ある。中でももっとも重要なものは授業だと思う。最近、教師力などの「力」のつく言葉がよく見られる。私は、教科書作成という立場から中学生の教育に長年かかわってきた。私には中学生の一人ひとりの顔は見えないが、どういうことを考え、どういう人間に成長してほしいかということを常に意識してきたつもりでいる。教育の本質は、教室という現場でもっとも実現する可能性が高いと思い、今回は授業力をテーマに雑感を述べることにしたい。

1 授業で伝えるもの

教科書が教育観の反映や教育用の素材であるならば、それを咀嚼して生徒に伝えるのは、教師であり、教室の場である。英語教育であるから、英語そのものを教えるのは当然である。英語そのものとは、英語の文法や語彙、発音、英語のコミュニケーションのとり方などである。まず教師は、このような英語を教える力量を持たなければならない。

一方で、英語教育は英語そのものだけを教えていれば良いのだろうか。とりわけ、公教育としての英語教育には、英語教育をとおして人間教育を行うという使命がある。世界のさまざまな文化を学んで視野を広げたり、英語をベースにして言語の働きや意義について考えたり、言葉をとおして人とかかわる体験をすることは、英語教育の重要な側面である。英語の教科書で、なぜインドを題材として取り上げるのだろうか。インドは多民族国家であり、多くの言語が使われている（世界には民族の数だけ言語がある）。また、英国との歴史的なつながりもある。そのため、英語の位置づけを考える上で、一つの典型を示してくれる。インドの中学生がどのような言語生活を送っているのかを知ることによって、日本

の中学生の言語生活との対比もできる。インドは、世界の英語の役割や現状を理解する上で、母語としての英語、第二言語としての英語、外国語としての英語、などを考える素材にもなる。英語教育が「そこに英語があるから教えたり学んだりする」だけでは寂しい。

2 引き出しを増やす

生徒に伝える熱い想いがあっても、授業力は一朝一夕には身につかない。教師の日々の試行錯誤や同僚との学びあいなどの体験が必要である。同じように教えても、生徒が同じように学んでくれるわけではない。授業の導入一つをとっても、文法から導入すべきか、オーラル・イントロダクションから入って文法の理解に結びつけるべきか、決定的な処方箋はない。経験をとおして自分の授業スタイルを確立するほかはないのである。

細かい例になるが、受動態を教える際に、以前は能動態と受動態の文を並列して、いわゆる^{たすき}襷がけの指導をすることが好まれていたが、今はこの指導はあまり好まれない。なぜだろうか。一つには、能動文と受動文では意味が異なる（つまり話題が異なる）からである。もう一つには、実際の言語使用で、「by + 名詞句」の入った受動文が使われることはきわめてまれだからである。

また、受動態については、多くの生徒が受動文をとおして過去分詞と初遭遇することになる。ならば、その際の過去分詞は過去形と同形のもので良いのだろうか、それとも spoken などのような不規則変化形の方がわかりやすいのだろうか。

授業は、習熟度やクラスサイズなど、さまざまな環境の中で行われる。教師は経験を積みながら、指導技術の引き出しを増やしていかなければならない。

3 学び方を教える

教師はとにかく教授法や指導法を意識しがちである。確かに、多くの教授法や指導法に精通していれば、それだけ良い授業ができる可能性が広がるが、根本的に確認しておかなければならないことは、授業の主体は生徒であり、学ぶのは生徒だということである。教師は生徒の学びを促進する立場でしかない。

現在、英語教育の分野で学習ストラテジーの研究が盛んに行われている。これは、学ぶ主体が学習者にあり、どうすれば効果的な学習ができるのかを解明しようとする研究である。たとえば、単語の覚え方にはさまざまな方法がある。生徒によっては得手不得手もあるだろう。そこで教師に求められることは、こうすれば単語が覚えられる、覚えやすいということを教えることである。また、リスニングやリーディングにおいても、どうすれば聴き取ることができたり、読めたりすることができるのかを教えることである。授業力の一つは、引き出しを多くすることだと述べたが、生徒の学習スタイルも学習進度もさまざまであるから、個に応じた指導をするためには、その分だけ手持ちの指導技術を増やしていかなければならない。

4 基礎・基本に立ち返る

近年、学校教育において基礎・基本を定着させることがとりわけ求められるようになった。生徒の立場では、基本的な文法や基本語彙などを着実に身につけていくことである。しかし、教師も英語の基礎・基本にときどき立ち返ってみたい方が良いのではないかと思うことがある。

たとえば、大学生であっても、any や some の用法に戸惑うことがある。彼らにその用法を尋ねると、any は疑問文と否定文で、some は肯定文で使う、と多くの学生は答えてくれる。ここまでは、学校で教えてもらったことなので何とか答えられるが、any が肯定文に出てくると、たちまち行き詰まってしまう。そんなとき、私は any の意味は何かと尋ねる。そして any の「心」、つまり基本的な意味は、種類を問わない、ということだと教えることにしている。

冠詞の a [an] と the をどう教えるかも考えなければならない。ある授業を参観したとき、ちょうど定冠詞の the を導入する場面であったが、楽器には the がつくって教えていた。確かにそのとおりであるが、これでは数限りなく the のつくものを覚えなくてはならない。私は、I have a ball in my bag. This is the ball. が一番わかりやすい導入の例だと思う。ここには不特定の a と特定されていることを示す the の本質的な意味の違いが明示されているからである。さらに言えば、ball に the がついているのではなく、the に ball がついているのだと教えたいと思うくらいであるが、それは行きすぎだろうか。

5 学習空間をつくる

勉強しない生徒が多い、と聞くことが多くなってきたように思う。近年、ヒューマニスティック・アプローチに焦点があてられるようになってきたのは、そのような教室環境が背景にあるからだろうか。

このような中で、学習空間という言葉が注目されている。これは、教室を生徒の学びが促進される環境にするということである。そのためには教師が教師として、また人間として、生徒から信頼を得なければならない。教師と生徒が良好なコミュニケーションを行うこともできなければならない。教師が良好な学習空間をつくることができれば、授業力としての力量はまずは合格点なのではないかと思う。

最後に、私が勤務する大学の教師訓を紹介したい。

進みつつある教師のみ人を教うる権利あり。

教育は結局「人」である。

教育はどこでも、いつでも真剣勝負である。

これはドイツの教育者ディーステルヴェークの言葉であり、本学の教育実習日誌にも掲載されている。ここで言いたいことは、生徒は教師を見ている、ということである。教師は生徒に勉強しなさいと言う前に、自ら学ぶ姿勢を持ち続けること、そして真剣勝負で生徒と対峙して授業を行うべきだということである。このことは、何十年も授業を行っている私の今の課題でもある。今の子どもはそんなに甘くないという声も聞こえてきそうであるが、この教師訓を忘れたときには教師を辞したいと思う。